

RSウイルス感染症

2008.12.04

11月の中旬ころから、函館市内近郊では高熱を伴う風邪が流行しています。中にはアデノウイルスによるものであったり、溶連菌感染症だったり、12月に入ってはインフルエンザだったりと原因は色々ようです。その中で、赤ちゃんがかかるととても重症になるRSウイルス感染症が目立っています。

RSウイルス（Respiratory syncytial virus）は、冬場になると流行するウイルスです。インフルエンザに先駆けて流行することが多く、このウイルスが流行している間はインフルエンザの流行がまだ先にあることが多いようです。

赤ちゃんが生まれて最初の1年間で約70%のお子さんが感染し、2～3歳までにはほぼ100%の子どもが罹ります。お母さんからRSウイルスの抗体をもらっているはずの6ヶ月未満の赤ちゃんがこのウイルスに罹るともっとも重症で、中には細気管支炎といって呼吸困難になったり、肺炎になったりすることもあります。他のウイルス感染とは違い1度罹っても、また罹ることが知られていて、1度罹れば大丈夫ということではありませんが、2回目以降は軽症で、一般的な風邪の症状と区別はつきにくいです。

特徴的な症状は、ほんの少し熱が出た後、咳や鼻水といった症状から、咳が強くなり、ゼイゼイしたり、肋骨の間が引っ込むような呼吸で喘息？と思われる症状が出たり、呼吸ができなくなるほどひどい症状が出る場合があります。呼吸困難の症状が強かったり、高い熱が出ている場合には入院が必要になることがあり、RSウイルスに感染しているといわれたら、普通の風邪のとき以上に注意深くお子さんの様子を観察してください。

RSウイルスに感染しているかどうかは、鼻水を検査することで簡便にできますが、入院してからしか健康保険で検査することができないため、診療所では検査ができない場合があります。

未熟児で生まれたお子さんや肺や心臓に心配なことがあるお子さんでは重症になることが多いので注意してください。

特に、未熟児で生まれたお子さんでは重症化を防ぐ注射がありますので、未熟児で継続してみておられる先生に速めに相談してください。